

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 吉住 朋

論 文 題 目

Is the mid-term outcome of free right internal thoracic artery with a proximal anastomosis modification inferior to in situ right internal thoracic artery?

(両側内胸動脈使用冠動脈バイパス術における右内胸動脈使用方法の検討)

論文審査担当者 名古屋大学教授

主 査 委 員

室原豊明

名古屋大学教授



委 員

神谷香一郎

名古屋大学教授



委 員

横井香平

名古屋大学教授



指導教授

碓氷章彦



論文審査の結果の要旨

冠動脈バイパス術において最も信頼性の高い graft は内胸動脈であり、両側内胸動脈(BITA)使用は、片側内胸動脈使用に比べて術後長期生存を改善する。しかし BITA をどのように配置して血行再建を行うかについての明確な指針はない。使用方法は大きく分類して、in situ graft として使用する方法と free graft として使用する方法がある。In situ graft は元々の graft への inflow を使用できる利点があるが、graft 長の制限が生じる。Free graft は inflow を確保する為に新たな吻合が必要となるが、より graft 長を確保できる。Free graft への inflow 確保の一つとして、graft と上行大動脈の中樞吻合が報告されているが、内胸動脈の形状から手術難易度が増し、時に中樞吻合部位狭窄を引き起こす事が報告されている。また長期成績についての報告もない。本研究では右内胸動脈(RITA)を中樞吻合の工夫を行い free graft として使用する群と in situ graft として使用する群について、周術期及び術後遠隔期の心事故発生、生存、グラフト開存について比較検討した。

本研究の新知识と意義は要約すると以下の通りである。

1. Free graft 群は in situ graft 群と比較して、遠隔期生存及び遠隔期グラフト開存は同様の結果を示し、且つ心事故発生を減少させた。その原因として free graft 群における RITA 末梢吻合箇所増加による心筋還流域増加が一因と考えられた。
2. Free graft 群は in situ graft 群に比べ手術時間が延長したが、RITA の末梢吻合数が増加した事が一因と考えられる。本研究で行った中樞吻合の工夫は複数の外科医により行われており、また術後 graft 開存率は in situ graft 群と同等であり、術者による差異を認めないことから、技術的に標準的な手技となりうる術式である。
3. Free graft 群と in situ graft 群では、術前患者背景に大きな差異が無く十分比較検討可能であろうと考えられる。ただし両群間の術後フォロー期間に有意差を認める為、引き続きフォローを行い更なる遠隔期結果について解析を行う予定である。

以上の理由により、本研究は博士(医学)の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	吉住 朋
試験担当者	主査	室原豊明	神谷香一郎	横井香年
	指導教授	碓氷章彦		

(試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. 本研究で用いた中枢吻合法の有用性について
2. 本研究で用いた中枢吻合法の技術的な難易度について
3. Free graft群とin situ graft群の比較検討方法の妥当性について

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、心臓外科学一般における知識も十分具備している事を認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。